

本の紹介文

高草木光一編 吉川勇一・原田正純・最首悟・山口幸夫

『一九六〇年代 未来へつづく思想』

岩波書店 2011年2月刊

武藤一羊

『潜在的核保有と戦後国家——フクシマ地点からの総括』

社会評論社 2011年10月刊

(1) 高草木光一編 吉川勇一・原田正純・最首悟・山口幸夫
『一九六〇年代 未来へつづく思想』

岩波書店 2011年2月刊

『南日本新聞』 3月27日号

命のあり方問う証言集

1960年代の日本の高度経済成長の陰で、多くの命が失われ、あるいは危機にさらされた。水俣病の被害拡大や甚大な炭鉱事故がその例であり、世界的にも、核戦争寸前のキューバ危機（62年）や、枯れ葉剤散布で多くの健康被害を招くベトナム戦争（65年）が起こる。公害や戦争という文明社会の矛盾に社会に属する個人はどう向き合ったのか。問われたのは、危機に瀕する命の尊厳をどう守るかだった。

本書は、2010年度慶応義塾大学経済学部で開講された「現代社会史」の講義録。登場するのは、「ベトナムに平和を！市民連合」事務局長の吉川勇一、水俣病や三池炭鉱事故で一貫して患者と被害者に寄り添う医師原田正純＝さつま町出身、環境哲学者の最首悟、脱原子力発電を掲げるNPO法人「原子力資料情報室」の共同代表山口幸夫の4人。市民運動や反戦運動、患者の掘り超こしを通じ、命のあり方を問い続けた信念や葛藤、行動の舞台裏が余すところなく語られている。昭和

史を検証する上での貴重な証言集でもある。

編者の高草木光一・慶応義塾大教授は、60年代を「主体的な個人が確立されていた」と分析。例えば水俣病をめぐるのは、当時、原田以外にも作家の石牟礼道子、写真家の桑原史成、東大大学院生で後に環境学者となる宇井鈍など多くの若者が、問題の重大さを世に問い続けていた。原田は語る。「当時はお互いを知らなかったが、大切な事件という直感を共有していた。立場の違う人たちが関心を持ち、その時代を切り取ってきたのが大事だ」

彼らは政党や大きな組織の後ろ盾を持たない。「主体的」に考えて起こした個人の行動が同じ方向を向き、結果的に大きなうねりを生み出した。4人は講義を通じ、未来を担う若い世代に“遺言”を残す意味合いもあっただろう。「自分たちが動けば世の中が変わるかもしれないと思った」という吉川の言葉が、「主体的とは何か」という問いを突きつける。

(社会部・山崎省吾)

『週刊読書人』 2011年4月1日号

日米相互協力及び安全保障条約（新安保条約）調印にはじまった「日本の一九六〇年代。核兵器による戦争の恐怖、水俣病など環境汚染による公害、ベトナム戦争、キューバ危機、パレスチナ解放機構の設立、第三次中東戦争、全共闘運動…様々な出来事が起こり、歴史の転換点とも考えられる六〇年代。この激動の時代に、節目となる事件や運動の主役であ

った四人を招いて行なわれた連続講義の記録。吉川第一（平和運動家）、原田正純（水俣病問題に取り組む医師）、最首悟（環境哲学者）、山口幸夫（市民科学者）が語る、原水爆禁止運動、東大闘争、三里塚闘争の話。（A5判・304頁・2625円・岩波書店）

『東京新聞』 夕刊 2011年4月12日号

環境問題でも障害者問題でも、歴史を遡ると必ず行き当たるのが、1960年代。日本では「飢え」が一段落し、今度は科学技術と生産至上主義の興隆が、「いのち」を地球大で脅かし始めた。すると、科学が哲学されなければならない。

「ベ平連」の吉川勇一、水俣病を追及した原田正純、東大闘争の最善悟、三里塚などで働いた山口幸夫が登場するが、彼らの思考の背後には、故小田実や高木仁三郎らの姿が見える。全共闘世代は、その後大勢に順応したわけだが、落とし

前をつけた人もいる。大学を辞し、「市民科学者」として脱原発を貫いた高木に較べれば、いまテレビで解説している核科学者たちは、半減期2万4000年のプルトニウムの上に建つ文明を否定し切れていない疑いがある。60年代以来の思考が、実はこれからの未来を照らすというこの本は、いま、実に説得的。岩波書店・2625円。

(月)

『遊民』第3号 (2011年5月1日刊行)

『遊民』は遊民社刊、季刊。500円＋税。連絡先は468-0061 名古屋市天白区八事天道706 山下智恵子方 Mail: chieko@yahoo.co.jp)

●『一九六〇年代——未来へ続く思想』(岩波書店)が刊行された。

一九六〇年代とはどのような時代であったかの決定版といってもよくその内容は論考というよりも、著者自らが関わった事例から生まれた緊張をはらみながらも面白可笑しい具体例の読み物といっている。

肩肘張らない読み物としているのは、慶応大学経済学部の連続講義を基にしていることと、その語り手が真田十勇士ならぬ多彩な力量の持ち主である市民派五人衆に由ることにある。その五人衆とは、①運動を通して培った圧倒的な知識と人脈を糧として、この国の市民運動・平和運動を根づかせた草分け的存在である吉川勇一氏。

②水俣病の世界的権威であると同時に、大佛次郎賞、吉川英治賞、朝日賞等の受

賞者である原田正純氏。

③東大闘争・助手共闘の中心メンバーとして関わった後、二十七年間助手のまま定年退職してその志を貫き通し、障害者問題から「いのち学」を構築した最首悟氏。

④このところの原発問題に関するテレビ番組には、御用学者と対決する原子力資料情報室のスタッフがしばしば登場するが、この情報室の室長の山口幸夫氏。

⑤そしてこの本の編者である慶応大学経済学教授の高草木光一氏。

小田実が、「世界に例のない面白い学部」と賞賛したのは、社会思想史専攻のこの高草木教授がいたからである。

まずは書店で、ぺらぺらとめくってみてください。そこに六〇年代の自分を見出すはずです。(み)

『市民の意見』No. 126 (2011年6月1日号)

『市民の意見』は、市民の意見30の会・東京の機関誌。連絡先は151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 電話：03-3423-0185

Mail: iken30@mwb.biglobe.ne.jp)

このたびは吉川さんの『原水爆禁止運動からベ平連へ』という論文を収録した『一九六〇年代 未来へつづく思想』を贈って頂いて本当にありがとうございます。早速、息もつかずに読み通しました。これまで長年にわたって吉川さんたちの運動の周辺にあり続け、今年 88 歳になり、自宅から 2km ぐらいしか活動範囲がなくなっているながら、それでも「^{いのち}生命と暮らし」を中心とした視点から、何とか平和・反戦のための行動を続けたいと思っている私に元気を与えてくれる文章でした。

現在の私にできることは毎月 1 回地域の憲法学習会、教会の九条の会、そして自宅の読書会ぐらいのことですが、軍隊経験者が絶滅危倶種となっている今日、軍隊経験も生かして、安保武力による抑止を徹底的に問う本を出したいと、書く体力はないので話した内容を専門のライターにまとめてもらうという方式を進めているところですので、その意味でもいろいろ教えられることが多くありました。

第一に、それぞれの時代の「暮らし」がみごとに描かれているのが印象的でした。戦後食べ物のない時、特別の意味を持ったマーガリン、胸のポケットが右にある裏返された背広、60 年当時のお父さんの貴重な一杯のビールを反戦活動後は「キリンビール断ち」する話し等々。こ

うした日常生活へのまなざしこそは、くらしに根ざした運動の基礎なのだと感じました。このような描写のうまさは、単に話し方の技術の問題ではなく、運動が生活する人間によって支えられていることを示すという点で感服しました。

第二に、このようなまなざしの上に展開されたこれまでの運動組織論の再検討という点でも、私の図式的理解に反省を迫る具体性に教えられることが多かったと思います。原水禁運動当時の「筋幅論争」(編注 1)、60 年代の「ベ平連トンネル説」(編注 2)などをめぐるどろどろした当時の動きは、人間と組織の関係を具体的に思い起こさせてくれます。

とりわけ重要だと思ったのは、そのような混迷の中で見出されたベ平連の「共同行動の新形式＝行動目標が一致する限りで協力し、意見の違いを認め、他人の行動に介入せず、お互いに中傷しない」についてで、これはベ平連の貴重な遺産として今日でも参考にすべきものだと痛感しました。

最後に、終わりの部分で、砂川での非暴力直接行動に感動して先住民運動をはじめたデニス・バンクス氏との砂川闘争以後約半世紀を経た後の出会いの事例は、結論として長期的展望の必要性を強調された点とともに、読者に希望と自信を持って活動を続けるための手がかりを与え

るものとして、今後大いに利用させていただきたいと思います。

以上、とりあえずの読書感です。くれぐれも健康に留意され、いつまでも元気に発言を続けてください。

(いしだ・たけし、政治学者、本会会員)

(編注1) 筋を通して「反安保」まで踏み込むべきか、国民参加の幅を重視した平和運動に限定すべきかという、当時の原水禁運動における政治路線論争(編注2) ベ平連は、いわゆる日和見左翼を新左翼に鍛え上げるためのトンネルだ、との揶揄を込めた中傷

『運動〈経験〉』 No. 33 (2011年7月30日号)

『運動〈経験〉』は、反天皇制運動連絡会が編集し、軌跡社が発行し、社会評論社が発売している季刊雑誌。

〈1968〉論議 4 『科学技術とエコロジー』『一九六〇年代 未来へつづく思想』をてがかりに

天野 恵一

(長文で、前半に「1. 〈3・11〉以降の『大学解体』と『御用知識人』」、「2. 『知の権力性』をめぐって」、「3. 科学の『技術化』・『体制化』・『巨大化』・『国策化』・『商品化』」の3節があるが、そこは省略し、第4節のみ紹介。そのあと、「5. 〈反核〉・反原発・反天皇制」の節が続いているが、それも省略。)

……(前略)……

4 未来へつづく叛乱

小熊英二の大部な著作が、よく売れたということも大きな契機になったのであろうか、(一九六八年)をテーマにした本が、この間かなり出版され続けてきた。私は、それらのいくつかに眼を通してきたが(注4)、今、私がここで執着している問題にこそこだわって、六〇年代から今日までの問題を整理して論じ

ている著作がある。高草木光一編の『一九六〇年代 未来へつづく思想』(二〇一一年、岩波書店)がそれである(注5)。

著者はそこに収められている「一九六〇年代から考える」で、こう論じている。

「ベトナム戦争に対して起こった世界的な反戦運動は、近代文明そのものに対する懐疑を生み出します。世界最大の軍事力と経済力をもつアメリカ合衆国がアジアのちっぽけな

農業国に対して、何の大義もなくしかも残虐な殺戦をくり返したことは、アメリカの軍事行動に対する不信にとどまらず、アメリカに代表される現代文明そのものに対する懐疑を生み出すことになったわけです。／ベトナム戦争に敏感に反応したのは、アメリカではまずは徴兵の可能性のある若い世代でした。その反戦運動は、世界的な規模で起こった若い学生たちの大学改革・解体運動とも連結していきます。いわゆる「スチューデント・パワー」の嵐が、アメリカでも、ヨーロッパでも、日本でも吹き荒れました。

日本では医学部処分問題に端を発する東大闘争、二〇億円以上の使途不明金問題で沸騰した日大闘争などが熾烈を極めました。発火の原因はさまざまですが、文明の先端にあってその『粹』を生産する大学という場において、『権力』と『知』の癒着構造が明らかになりました。もはや授業料値上げや学生処分という個別の事柄が問題なのではなく、学問のあり方、大学のあり方、つまりは文明のあり方が根底から問われることになったのです。

編者は、この本のモチーフについては、自分もかろうじて端にひっかかった一九六〇年代から五〇年以上が過ぎ、「関係者も当然のことながら^{よわい}年齢を重ね、鬼籍に入った方々も少なくありません。『主体』自らが語るべき『主体』の歴史は、おそらくいまその限界に来ているように思われます」と語っている。

運動「主体」自身が語る、六〇年代以降の運動史（プライベート・ヒストリー）をふまえた「一九六〇年代思想」という、この編者の意図は、十分に貫徹されており、本書のその点は、他の〈一九六八〉本にはない魅力

をたたえている。

語り手は四人である。反戦平和運動一筋に生き続けている、「ベ平連」の事務局でもあった吉川勇一（一九三一年生まれ）。水俣病問題に一貫して取りくんできた医師の原田正純（一九三四年生まれ）、東大闘争時は「助手共闘」のメンバーとして、「ノン・セクト・ラディカル」の元祖ともいわれ、生物学から「独自の『いのち学』」へと思考と行動の歩を続けている最首悟（一九三六年生まれ）、もう一人は、科学者の社会的責任を問うという視角から、高木仁三郎とともに反原発運動のリーダーとして活躍し、高木の死後も長く活動し続けている山口幸夫（一九三七年生まれ）。

世代的にいえば「全共闘」世代とはいえず、一世代からそれより上の世代の人間の語りである。しかし吉川以外の三人が自然科学畑の人間である点が、本書全体のユニークさを支えている。その事が、あの時代の叛乱が問うた意味を、その前後の歩みを通して、より鮮明化させようという編者のモチーフにふさわしい内容を提示させることを可能にしているのだ（もちろん吉川のヒストリーも、それはそれで読みごたえのあるものであることは言うまでもない）。

六〇年代後半から七〇年代への時間の中で三人の発言を、少しつまんで示そう。

「一九六八年に、厚生大臣がいわゆる『公害認定』を行います。これではじめて公害が公になったわけです。私はこのときに水俣に行っていて、水俣の患者さんたちがこの公害認定を歓迎している様子を不思議に思いました。水俣病の原因はチツソの垂れ流した有機水銀による中毒ということはとっくの昔から

わかっているのに、どうしていまさら大げさな政府認定をするのかと文句を言ったら、患者さんたちにたしなめられました。『先生、医学が水俣病の原因はチッソの有機水銀だと言っても、それでは不十分で、やっぱり国がきちんと認めてくれることが必要だ』といわれて、私は『なるほど』と思いました。

「チッソの主張は、水俣病の前に水俣病はなかった、予想できないことは予防のしようがない、という『予見不可能性』でした。それに対して、企業は安全を確認したうえで流すべきで、安全かどうかわからないものを流したことが問題だという『安全性の考え方』を判決は採っています。

これは、今後のさまざまな問題を考えるうえで有効な判決です。エイズにしても、肝炎にしても、危険だとわかったときにはもう手遅れなのです。もちろんその論理は、富樫貞夫先生（熊本大学名誉教授）たちが水俣病研究会で議論してつくりあげたことが基礎になっていると思いますが、それを裁判所がきちんと認めたことは大きな意味があると思います」。

「私は水俣病を五〇年、三池の事故も四〇年追いかけてきました。他に一〇年めにまとめた報告はありますが、こんな長期的なものは世界中にはありません。天才的な人がパッと閃いて研究成果を上げることもあるでしょうが、私は天才ではないので、長くしつこく追いつけた。しかし、四〇年も追いかけたら世界一になります。一酸化炭素中毒は、練炭で自殺するぐらいですから、日常的にどこでもあります。ところがどんなに探しても、一〇年以上追跡した例が世界中にない。しかも、三池炭坑の事例では、多くの被害者がいろいろな

条件でガスを吸わされているので結果的に人体実験をしたような貴重なデータとも考えられるのです（「水俣と三池」原田正純）。

原田の主体的で執念深い追跡のスタートも、六〇年代という時代の空気の中で生まれたものであろう。

東大闘争をくぐってから水俣病問題にかかわりだした最首は、こう語っている。

「安保闘争のあと『三無主義』、つまり無関心、無気力、無責任がはびこる静かな大学のなかで、ベトナムが関心の中心になっていきました。ベトナムを問題にすると、戦前、戦中、戦後の日本がやってきたことの検証はまだ終わっていないという反省が強くのしかかってきます。加えて山口二失像も含めて一人で闘うという発想がありました。理工系の学生で反ベトナム戦争、反米、反核をスローガンにした『ベトナム反戦会議』をつくることになります。これは『会議』ですから組織ではなく、一人で闘うという意識を示しています。／ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）に対抗する気概ももっていました。ベ平連は、吉川勇一にしても小田実にしても、ちょっと『おじさん』で、ジェントルマン、インテリゲンチャが中心にいる。『市民』という言葉も自分たちには馴染まない。眉つばの眼でみれば、小田実の市民は、古代アテナイの市民にいきなり飛んでしまう。働かない市民、奴隷を使う市民、男だけの市民です。『市民は暴力を振るわない』というのも嘘っぽいし、『市民連合』と言っても、どこに市民がいるんだという思いがありました。／『ベトナム反戦会議』は、東京大学の理学系大学院生を中心につくられました。主力は、山本義隆たち物理

の大学院生で、日本物理学会がペンタゴン（アメリカ合衆国防総省）から三億円受け取っているという『米軍資金問題』に取り組みます。アメリカでは財団とペンタゴンが大学を支えていますから、ペンタゴンが日本物理学会に資金を流すのはいわば当たり前のことです。その他にもありとあらゆる団体に資金を流しています。こちらが『反対』と言っても相手はキョトンとするだけでしょう。そういう構造に物意の大学院生たちが反逆していきます。東大全共闘の無党派、ノンセクトの中心はこの物理の大学院生たちでした。その意味では日大全共闘とは毛色が違います」（「東大闘争と学生運動」）。

最首たちの「ベ平連」に感じた違和感は、六〇年代末に私たちの持ったそれと、かなり近い。その点はともかく、アメリカから輸入された産・軍・学（知）協同の巨大科学システムへの叛乱の時代のはじまりがここにあったことは、この証言から読めるはずである。山口幸夫も、こう語っている。

「私がアメリカに行っている間に、日本では『ベ平連』ができ、日本物理学会の米軍資金導入事件が起きています。本郷の東京大学へ戻ってきますと、すぐに安田講堂封鎖という出来事にぶつかりました。その動向は、アメリカにいても薄々は知っていました。『大学は真理探究する場である』と標榜する大学当局が、医学部生を不当に処分したことで学生が反乱を起こし、東大闘争が始まったのです」（三里塚と脱原発運動）。

山口は、そこで六〇年代という時代の大きな特徴について、こう述べている。

「私たち、つまりほぼ同学年で、化学や物

理学を志した高木仁三郎さん梅林宏道さんや私たちにとって、六〇年代には三つの大きな特徴があったと思います。一つは『黄金の六〇年代』と言われるほど、『科学技術』が盛んな時代でした。その分野にだけ目を向けて熱中していれば、すっかりそのなかにはまってしまうと、満足で快適な研究生生活、社会生活を送ることができたことはたしかです。しかし、その裏では『いのち』が軽んじられた時代でもありました。科学技術の隆盛に乗って『開発』が闇雲に推し進められた結果、『三里塚闘争』が起こりますが、私たちは、そうした『陰』の問題を無視して研究生生活に没頭することはできませんでした。／二つめはアメリカの強大な軍事支配が地球上を覆っていたことです。典型的に現れているのは、ベトナム戦争に対して科学技術者が関与した大きな犯罪行為です。六〇年代後半に私たちはその問題に気づき、文献を読み議論をしました。軍事支配下の科学技術はどうなるか、私たちにとってベトナム戦争は、ひとごとではなかった。私たち自身が関与しているという意識で、自分たちの研究を考え、生活を考えることが避けられない状況でした。／三つめは『核』の問題です。『核』と言いますと、核兵器を意味することが多いと思いますが、もう一つ、『原子力の平和利用』という美しい表現が一九五三年にアメリカのアイゼンハワー大統領によって使われて以来、それがあたかも当然のごとく受けとられる時代が続きます。原子力の平和利用が可能かどうか。原子力は夢のエネルギーかどうか、これも研究者として真剣に向き合うべき問題でした。／そうした六〇年代の末に『ぷろじえ』というグループで

いろいろ考え議論しました。ベトナム戦争を強行するアメリカに対して、日本に住む私たちに何ができるか、『ただの市民』という考え方で行動しました。『核』の問題については、高木仁三郎さんが原子力資料情報室の専従世話人、次いで代表として亡くなるまで全力を尽くした。いま私はその共同代表の一人です。『脱原発』にどのような中身をもたせるかは、今日の問題としてあると思っています』

(傍線引用者)。

最後の言葉は〈福島原発事故〉以降の現在、ようやく日本でも〈脱原発〉のうねりが、力強く確認できるようになりつつある今、ますますリアルに実感できるであろう。

今日の〈脱あるいは反原発〉運動の発端も、

六〇年代学生叛乱の中に求めることが可能であるという事実は、今こそ想起されるべき事ではないか。

…… (以下省略) ……

(注4) 私は『市民の意見』(「市民の意見 30 の会・東京」のニュース、11年6月1日〈126〉号)に『もうひとつの全共闘 1968-1972』(芝工大闘争史を語る会編、二〇一〇年、柘植書房新社)と『路上の全共闘 1968』(三橋俊明、河出ブックス)、『1968 年文化論』(四方田犬彦、平沢剛編著、毎日新聞社)の二〇一〇年に刊行された三冊の書評を書いている。

(注5) 『連続講義 一九六〇年代 未来へつづく思想』(二〇一一年、岩波書店)。これは慶應大学での「現代社会史」の講義をベースに編まれた本である。

『科学 社会 人間』 No. 118 (2011年9月15日)

(同誌の連絡先は 275-0016 習志野市津田沼 5-2-14 白鳥紀一方)

向井 宏一郎

「連続講義 1960 年代未来へつづく思想」は、慶應大学で行われた現代社会史での講義を元に書き起こした本で、編者：高草木光一を含め、吉川勇一、原田正純、最首悟、山口幸夫の 5 人の講義から構成されている。本のはじめの部分は、高草木による導入というか問題提起・整理であり、60 年代に起こった事柄のザックリとしたまとめと考察。小田実について論じる部分なども含め、それなりに読み応えのある導入になっている。つまり、い

ろいろと知らない人の名前が出てきたりして、一読しただけでは分からない部分がそこそこある。「シエースって若者の挨拶？」みたいな。(フランスの思想家です)

本の構成は、高草木の問題整理を受けて、吉川、原田、最首、山口の 4 人の話が続いて展開されるという形となっている。この 4 人は全員が 1930 年代生まれ。60 年代を 20~30 代の青年として過ごした人々だ。60 年代、大きく揺れ動く社会と巨大な運動のうねりのただ中に身を置い

た4人それぞれの経験が、わりと淡々と話されている。吉川は、原水爆禁止運動・60年安保・ベトナム反戦・脱走兵支援運動、原田は水俣病と三池炭塵爆発事故、最首は東大闘争、山口は三里塚闘争と脱原発運動。どれひとつをとっても、当時の大事件であり、社会の構造の根幹を揺るがした出来事だ。4人の話を通して、本当に多くの人たちが自らの暮らしと存在に根付いたものとして運動に身を投じていたことがわかる。

これらを、各運動課題の要約として読むことも可能だ。4人とも、各戦線（運動課題）のはじまりから終わりまでをその渦中で過ごした人々であり、その語りは、出来事の構成や経緯の把握が正確だし、実際に体験した生々しさがある。実際のところ、左翼運動に関わっている人でも、これらの出来事（闘争）の骨子について実はあまり知らないという人は結構多いのではないだろうか。とくに、20代-30代の活動家は、ここ十数年ほどは学生運動が弱くなり消えてゆきつつあることもあって、学習会を通して知識を得ることもなかなか機会がないだろう。それに、一旦運動の現場に身を置くと、案外と本など読まなくなるものではないだろうか。また、年上の活動家とそれらの話題について話したとしても、「ふーむ、（今時のひとは）そういうことも知らないのですか、なるほどね」とか、「知らないなら知

らないで、まあいいんじゃない？」というような、親切だか何だかよく分からない気遣いなどのおかげでそのまま知らないままだったりとか。もっとも、この「科学・社会・人間」の読者に、20代~30代の活動家がどのくらいおられるのかはちょっと想像つかないが。もちろん、左翼でない人は尚更知識にふれる機会も少なからうと思う。ただ、「60年代を代表する各戦線の要約」として考えるとあまりにもったいない、というか、各氏の話は、“要約”には収まりきれない内容にみちみちている。まず第一に、「実際に起こったこと」だけを並べてみても、その出来事の持つ素晴らしさと圧倒的な力動性には、読む人の胸をうつものがある。

吉川の話の中では、脱走兵援助運動の部分は、何度聞いても（読んでも）その劇的な展開はおもしろすぎる。こんな運動が、たった50年前にこの日本で起こっていたというのは、ほとんど信じがたいような話だ。もっとも、50年も昔の話ともいえるが。

原田の話の中では、冒頭に水俣病の発生からその原因の究明へと至る3年半にわたる出来事の流れが語られるが、それは企業（チッソ）が水俣病への自らの責任をもみ消そうとした3年半であることがはっきりわかる。この構図は三池炭塵爆発事故でも、また50年後の今日、福島

第一原発事故後の放射能汚染を巡る国と企業の動きの中でも繰り返されていることだ。また、水俣病の発生から40年にもわたる関わりの中で、原田が水俣で暮らす人々の側へと歩いていく姿が語られるのも感動的。40年間ってというのはなんととっても長い。

最首の話は、東大闘争を助手共闘の一人としてたたかった経験を基盤にしつつ、「自らの加害者性」、「自己否定」という重要なキーワードを巡って話題を紡ぐ。あいかわらず、わかるようなわからないような話が同心円を描きつづけるように展開する。(メモをとったら少しはわかるかな、と思い、ノートをとってみたのだが、あまり役には立たなかった。)「自らの加害者性」というのは、「自己否定」と微妙に重なりながらずれていく重要な概念であり、私たちは常にそこへと立ち戻りながら歩みを進めていくしかないと思っているのだが、最近はある程度受けがよくない。重要なのは、これらの概念が実際の運動・何らかの行動と結びつく中で反芻されることだと思うのだが……。

山口の話では、高木仁三郎の横顔と三里塚闘争、そして山口自身の活動が、床屋さんのねじり看板のように交錯しながら進んでいく。特に、高木が活動家として生きていくきっかけとして三里塚の運動がこれほど大きく関わっていたこと、また、三里塚の鉄塔建設の中心に高木が

いたことは、この話を読むまで知らなかった。また、山口は物理学者の出自を持ち、物理学のフィールドを足場にして活動を続けている人なので、本誌の読者の皆さんにはすんなり入る話も多いのではないかな。

こうして見ると、4氏とも、その語り口の軽さに驚かされる。いい意味でもったいぶっていないし、暗さが少ない。それぞれの話を注意深く読み込めば、またあるいは多少の背景の知識をもって読めば、運動の中でかなり暗く悲惨な局面を経験していることが想像できる。そのような経験をくぐりつつ、そもそも活動を続けて来たこと自体が驚異だし、語りの中で厳しさをそれほど感じさせないのはさらに驚くべきと言えないかな。

ただ、60年代の思想と経験を引き継ぐということについて考えると、その可能性と同時に不可能性についても考えざるを得ない。4氏の生き生きとした語り活字の中に閉じ込められない力を持っていればいるほど、そう感じる。社会運動における思想や経験の継承は、諸々の局面を前にしての分析や判断を通してこそ行われるのだと思う。世代だけに限ったことではないが、それぞれが経験してきた運動の時代背景や社会情勢の違いによって、実際の運動課題に対する判断や視点には、当然ながら違いが生じる。例えば、

現在取り組まれている運動が2~3年続いているとして、その運動のみに関わってきた人には持ちようのない視点があると思う。例えば、それこそ50年前には社会情勢の中心にあった物事で、現在は後景化しているような事柄は多い。そしてそれらが後景化していても本質的な重要性を保持している場合には、そこに立脚した視点や立場が必要とされる場面もあるだろう。もちろん、上の世代の分析や判断が、常により優れているかというところでもなく、大体は現場の機運や動きを読んでいない、どうしようもない判断も多いのではないか。しかし、そのようなどうしようもなさやセットで、局面ごとのひとつひとつの判断を通して、その判断を導き出す思考の方法のようなものが共有されていく。たとえその人がいなくても、「こういうときXXさんだったらどう言うかな」というような具合に。思想や経験の継承とは、こういった形で行わ

れてきたし、行われていくものではないかと思う。

また、もう一つは、社会運動が続いていくにあたって、遅かれ早かれ突き当たる落とし穴や壁のようなものがいくつもあるということ。引きずられがちな悪しき傾向というか。そういったマイナスの問題に向き合うとき、それを全く知らないものとして、完全な手探りで一から試行錯誤するのか、それともこれまでの蓄積（多くは負の蓄積）を踏まえて対処するのか、で必要なエネルギーは全然違ってくる。そういうときは先達の存在は本当に重要になる。

というわけで、いわゆる左翼的な社会運動が高齢化の大きな波を迎えようとしている現在、ご高齢の方にはご自愛いただきたいと思うのだ。

(2) 武藤一羊

『潜在的核保有と戦後国家——フクシマ地点からの総括』
社会評論社 2011年10月刊

(10月下旬刊行なので、まだ書評はほとんど出されておらず、事前の紹介文の以下1点のみ)

『市民の意見』 No. 128 (2011年10月1日号)

『市民の意見』は、市民の意見30の会・東京の機関誌。連絡先：151-0051 東京都渋谷区
pg. 13

脱原発の書籍数点のご紹介

——脱安保との関連の意見も注目—— (写真は略)

吉川 勇一

◆3・11以後、脱原発の書籍は多数出版され、とても全部は眼が通せない。ごく一部だけになるが、何点かをご紹介します。

まず広瀬隆の2点。『原発破局を阻止せよ！』(朝日新聞出版、1200円+税)は最新のもので、「週刊朝日」で現在も連載中の記事の編集だ。その冒頭に編集者の堀井正明が書いているが、元来は、3・11よりも半年以上も前に、今読んで驚くほど、今回の大地震、津波、そして福島原発事故を完璧に予想し、警告し、戦慄した書籍を広瀬は出版していた。それがもう一冊の『原子炉時限爆弾』(ダイヤモンド社、1500円+税)だった。

◆まず新著のほうを読みたい。非常にわかりやすく、興味深い具体例や写真、図例とともに書かれてある。リニア中央新幹線が無用の浪費と指摘されたり、中国と日本の事故に共通の隠蔽体質があるという論述など、新鮮な内容であり、かつ納得できる。そして、さらに地震と原発の関連について広く読むのなら、後者をお勧めする。これもわかり易い本だ。

◆この中で、広瀬は、地震学者の石橋克彦が「原発震災」と呼んで、前から問題提起を続けてきたと述べている。この石

橋が編集した書物に『原発を終わらせる』(岩波新書、800円+税)がある。全部で14人の専門学者が、原発の問題性をそれぞれ多角的に考察したものだ。その最後に、本会の会員でもある原子力資料センターの共同代表、山口幸夫が、「原発のない新しい時代に踏み込もう」と書いているが、まさにその指摘の通りだ。ただ、残念なのは、全員が専門的な学者のせい、正確に論述するためだろう、注や括弧内の説明などを入れすぎ、かなりわかりにくい文が少ない。もっと素人にわかりやすい表現だったら、と思う。

◆『磁力と重力の発見』の著者、山本義隆が最近出したものが『福島の原発事故をめぐって』(みすず書房、1000円+税)だ。これは『磁力と…』とは違い、素人もよく分かるような表現だ。冒頭、日本の「原発開発の真相底流」で、岸信介や中曽根康弘の動きなどを読んでいて、まったくそうだ、そうだと口に出してしまいたいような、50年代以降の日本の政治・経済の動きが説得力をもつ論述となっている。

◆後半「科学技術幻想とその破綻」では、『一六世紀文化革命』2巻(みすず書房)の著書だけに、山本は原子力は「かつてジ

ユール・ヴェルヌが言った『人間に許された限界』を超えていると判断しなければならない」と断言し、「原発ファシズム」という言葉まで使いながら「根本的に新しい社会のあり方を見出すべき時がすでに来ている」と指摘する。脱原発以外の道がないという山口幸夫と同じである。お勧めできる。

◆1980年、市民の意見30の会の出発の際に、「日本を変える30の提言」を発表したがその第1項は「この社会を『核』のない社会にしよう。そのための手だてをつくそう。核兵器も原発も、核燃料再処理工場もいらない。再処理工場の建設はやめよ。非核3原則の厳守」だった。そして26項目には「憲法第9条の実現をめざせ。まず日米安保条約を辞め、米軍基地を撤去し、軍事予算を削減し、自衛隊をなくせ」とあった。だが、この原発と安保体制との関連を指摘した論述はこれまでにほとんどなかった。本来、日本の構造の本質には、その二つが深く組み込まれているのだが。

◆そこを鋭く追究した初めてといえる論文が近く出る。10月中旬に社会評論社から出版される武藤一羊の『潜在的核保有と戦後国家——フクシマ地点からの総括』に含まれる、最新の書き下ろし論だ。安保と原発の関連を指摘した武藤は、反核活動家の森滝市郎や今堀誠二たちの論を具体的に分析して、戦後の反核運動の経過をのべながら、山本義隆が辿った戦後

の日本政治の中での原子力「平和利用」問題の経過を詳細に論ずる。

◆そして、最後に武藤は、「新しい見通しは、非核化・非軍事化のそれである。アジア地域をめぐる関係全体を非軍事化する、それへ向けての下からの——民衆レベルの——非戦・非暴力の連帯を基礎にして、日米関係の非軍事化——そのカナメは沖縄からの米軍基地の完全撤去——と東北アジアの非核化と多角的平和保障関係の形成にむかう見通しである。それを実現するためには、日本が米中の覇権戦略のどちらにも加担しない立場を明確にし、領土問題をふくむ懸案を武力による威嚇によらずに解決する新しい方式を見出すことが必要である。／3・11がもたらした日本国家の破綻状態からの脱出口は、戦後日本の二重の核依存ときっぱり手を切り、脱原発・脱覇権・非軍事化に向けて一步をふみだすことにある」と結論する。重要な内容で、必読書の一つだろう。

◆東日本大震災の写真集もかなりの数で発行されている。例えばこの2点の写真集も、すさまじい映像には声を呑む。その大部分の写真は津波の被害のものだが、一部には福島県双葉町や大熊町などでの原発関連のものも含まれている。豊田直巳編『東日本大震災記録写真集 TSUNAMI 3・11』（第三書館、2800円＋税）および第三書館編集部編の同書名『PART2』（同定価）である。

◆最後の一点は、書物とはいえないパンフレットだ。「横須賀の原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会」制作の『横須賀の港に浮かぶふたつの原子炉』である。B5 変形 16 ページで定価 100 円である。薄いパンフとはいえ、横須賀軍港に配備されている原子力空母「ジョージ・ワシントン」にある二つの原子炉がいかに危険かを具体的に解説する。同艦にある 2 基ある熱出力 60 万 kW の原子炉は、福島原発の兄弟だと指摘し、巨大地震と津波はいかなる危険を引き起こすかをのべるとともに、すでに艦船修理時に放射能事故が多くあったとも明らかにする。ぜひご覧いただきたい。(連絡先＝〒238-0002 横須賀市大滝町 1-26 清水ビル 3 階 横須賀市民法律事務所方『横須賀の港に浮かぶふたつの原子炉』発行者、電話＝046-827-2713、FAX＝046-827-2731)

(よしかわ ゆういち、本誌編集委員)